

論文の和文要旨

論文題目 日常的越境空間の認知地図：タイ・マレーシア
国境東部における華人社会の考察から

氏名 高村加珠恵

本博士論文は、タイ・マレーシア国境東部における華人社会の形成についての人類学的研究であるが、その目的は華人という同質的な民族集団の形成過程を明らかにすることにあるわけではない。むしろ同地域に生きる華人の日常的越境行為を通して、いかに国境や民族を越えた跨境的關係性が構築されているのかに着目する。そして領域境界および民族境界という近代国家を規定してきた境界概念について、それが国境に生きる人々にとっていかなる意味を持ち、解釈されているのかを、日常的越境行為の中から抽出し、検討することにある。

本研究の大きな特徴としては、国境空間を政治的境界線として捉えるのではなく、むしろ人々が日常を営む生活領域として認識している点が挙げられる。ここでの「生活領域」とは、経済活動、通学、買い物など人々の日常生活と関わる行動範囲と重なるものであり、必ずしも国境内部で完結するものではない。これはまた人間の活動が行われる動的な社会空間として位置づけることができる。本研究では、生活領域としての国境空間において機能している境界性を理解するために「認知地図(cognitive map)」という概念を用いる。この認知地図とは、公的な境界概念には依拠しない、国境に生きる人々の生活環境が反映されたものであり、これは一定の時間をかけて形成されたと考える。よって本研究では華人社会考察のアプローチとして、第一に国境空間をプロセスの中で考えること、第二に人々の生活環境が刻み込まれた「認知地図」を描き出すこと、の二つを提示する。さらに国境

社会と国家との関係を考える際に、両者を互いに対抗するものとして捉えるのではなく、むしろ両者の間である種の共存関係が構築されていると考える。本研究では様々な日常的越境活動に着目することによって、国境に生きる人々の「認知地図」を抽出する作業を試みる。

本研究の調査地であるタイ・マレーシア国境東部、すなわちクランタン州（マレーシア）、ナラティワート県（タイ）共に、その人口構成、政治環境、宗教環境、経済環境において際立った特徴を持つ。まず人口構成ではマレームスリム住民が全体の9割以上を占め、非ムスリムである中国系住民とタイ系住民は圧倒的なマイノリティである。政治的環境から言えば、クランタン側では宗教的には非常に保守的で知られる野党 PAS が政権的基盤を持ち、一方の南タイ側のナラティワートはイスラーム分離主義勢力の主な活動拠点の一つとなっている。このように同地域は宗教的要素を背景とした政治性を持つ空間であり、しばしば中央政府に対抗する周縁化された地域でもある。経済的環境としては、クランタン側、ナラティワート側共に、ゴムの栽培を除けば、主な近代的工業や産業が不在であり、農業や漁業などの第一次産業が中心である。また同地域は、都市部への出稼ぎ労働者の主な排出地でもある。このように、タイ・マレーシア国境東部地域は、国家という枠組みにおいては周縁化された空間であると位置づけることができよう。このような背景から、先行研究においてもこの地域は特殊性や周縁性に強調が置かれている。また中国系人口は、非常にマイノリティであり、従来の研究では、農村に住み文化的にマレーやタイ風の影響を受けたプラナカンチャイニーズに焦点が置かれてきたものの、日常的越境を行う、あるいは国境を越えた関係性を持つ華人の姿についてはほとんど明らかにされてこなかった。

本博士論文の第一部では、20世紀初頭にさかのぼり、プロセスの中で形成される国境の華人社会を理解することを試みる。具体的にはクランタン英アドバイザー関連のアーカイブ史料およびオーラルヒストリーを基にタイ・マレーシア国境画定をめぐる政治的背景だけでなく、華人の入植背景や国境経済の形成を明らかにする。第一にタイ・マレーシア国境誕生をめぐる政治的背景の考察を行う。またタイ・マレーシア国境東部における初期の国境管理についての考察からは、越境者側に国境概念が不在であった時代の国境社会と国境を守る側の認識のズレ、および次第に明確な国境という概念を基盤としたインフォーマルなモノの移動の姿を明らかにする。第二に20世紀前半におけるマレー半島東海岸の経済および華人の役割を考察する。具体的には東海岸経済圏の経済的基盤であった錫、ゴム、米の流通に焦点を当て、地域経済の構造を明らかにするだけでなく、その経済形成における華人の経済的役割を理解する。第三に国境経済形成および華人の入植背景を考察する。具体的には戦前のトゥンパット港を中心とする物流システムの崩壊およびゴムブームによって、国境地域の新しい物流中心として台頭したスンガイ・コーロックやインフォーマルな物資のルートとして台頭したバンダクチル経済を明らかにする。第四に国境の華人社会における移民ルートおよび婚姻パターンを考察する。具体的にはオーラルヒストリーに基づき、多様な移民ルートの様子、現地タイ女性との婚姻、あるいは文化的宗教的なタイ要

素の内在化を考察する。

第二部においては、国境空間に生きる華人の生活環境が刻み込まれた「認知地図(cognitive map)」の理解を試みる。本研究では、経済活動、政治的関係性、教育の場の選択、婚姻パターン、文化的要素、法的地位という6つの側面に焦点を当てることによって、国境の華人社会における領域境界や民族境界の意味を考える。まず第一に「経済活動」という側面からは現代のタイ・マレーシア国境東部におけるインフォーマルな日常的越境のメカニズムを考察する。バンダクチル国境は、移民局や税関などの存在にも関わらず、インフォーマルな越境が日常化している。このような国境空間は、一見秩序が無く、国家の管理が弱いと認識されがちである。しかしながら本研究では、越境者側と管理者側によるある種の「了解」が介在する点に着目する。その「了解」を理解するために、インフォーマルなモノや人の越境がいかに国境空間内に限定されているのかを考察する。第二に「政治的関係性」という側面からは、リーダーシップ（指導者層）に焦点を当て、華人社会内部の力関係、および民族や国境を越えた複合的な関係性について考察する。まずバンダクチルにおける華人組織とリーダーシップの事例を取り上げ、リーダーとしての資質や条件、そして華人組織の役割を考察する。また政党馬華の持つ連邦政府へのチャンネルを通して、華人社会の利害を守るという構図を明らかにする。民族を越えた関係性の分析では、マレーとタイとの関係性を取り上げる。まずマレーとの関わりからは、政府の役人であるマレーとの日常的な政治的交渉のあり方を考察する。またタイとの関わりからは、経済活動や政治活動におけるパトロン・クライアント関係だけでなく、日常の様々なレベルにおける相互扶助的關係を考察する。国境を越えた華人間の関係性の分析では、日常的な越境活動を通してコネクションが形成され、それが彼らの国境を越えた経済的交流の橋渡しという役割につながっている様子を考察する。第三に「教育の場の選択」という側面からは、設立当初から現代までのある華文小学校における越境学生の変化を考察する。啓育小学校の設立当初においては、スンガイ・コーロックからの越境学生が半数以上を占め、学校財政を支えていたのはその父母たちであった。当時のアーカイブ史料を用いながら、啓育小学校の設立当初の様子や、1950年代末以降越境通学生に対して行われた政府の規制の様子を考察する。また当時、越境通学を行っていた学生の経験を考察することで、親戚・知人という国境を越えたつながりを通じて法的地位を作り出し越境を継続した姿を明らかにする。現代における啓育小学校の越境通学生の考察からは、マジョリティを占めるマレー学生に焦点を当てる。特に1980年代以降、マレー学生が華人学生の数を上回るようになり、その数は年々増加傾向にある。その中でスンガイ・コーロック側から通うマレーの姿も見られるようになった。マレー学生の越境通学の事例から、子供たちの法的地位（二重国籍）の問題や、バンダクチルの国境経済と密接に関わる越境学生の保護者の様子を明らかにする。第四に「婚姻」および「法的地位」という視点からは、日常的越境において多様化する華人やその婚姻相手である北タイ出身女性の法的地位の問題を考察する。そもそも啓育小学校における華人学生でスンガイ・コーロック側から越境通学する華人は全体の華人学生の

4割近くを占めるが、そのうち8割近くが北タイ出身女性を母に持つ。こうした子供たちや母親たちの日常的越境やその法的地位に焦点を当てる。そして複数の日常的越境者の事例から、日常的越境における法的地位の確保の役割や、国境空間が生活領域として機能することによって、法的地位を確保できない人々の日常的越境を可能にする役割を果たしている様子を明らかにする。尚、文化的要素という側面に関しては、日常的越境において多様な民族間の関わりが見られるため、それぞれの章で関わる問題である。最後に近年の国境空間における大きな二つの変化、すなわちバンダクチルの免税区化と南タイにおけるイスラム分離主義活動の問題に焦点を当て、インフォーマルな日常的越境を生活の基盤とするバンダクチルの華人社会における影響を考察する。

近代国家は領域境界を画定することでその主権領土を確保し、国民を形成する構成員を包摂してきた。そして均質な国民が想定される一方で、その多様性を持つ構成員を分類する作業において明確な民族境界を設定した。国民、民族といった境界性のやっかいなところは、その画定作業そのものは人為的、恣意的なものであるにも関わらず、その境界性に法的な正当性が与えられ、なおかつ常に帰属意識や感情が付随することによって、人々の日常生活の中でその境界性は補強されてきたことにある。そしていつのまにかあたかもごく自然な不可侵な境界として定着したのである。本研究では国境という空間においてこそ、この国家、民族という境界の持つ人為性、恣意性が可視化され、交渉されるものであると認識する。国境における日常的越境行為によって、人々は国家が画定する二つの境界性と常に向き合うことを強いられるからである。国家がいかに領域境界や民族境界の画定を行ってきたのかについては政治学や社会学における先行研究の蓄積があるが、国境社会においていかに領域境界や民族境界が日常の中で解釈されてきたのかという点に関しては、十分に検討されてこなかった。本博士論文は、近代国家が具現化してきた領域境界や民族境界といった境界性の意味をローカルなレベルで再検討する一つの研究アプローチとして提示することを試みるものである。